

李 潔非

中国作家協会秘書長の1957年  
——詩人・郭小川のもう1つの顔——

宇野木 洋（訳）

【前書き】

以下に掲載するのは、李潔非「作協秘書長的1957」（李潔非『典型文壇』湖北人民出版社、2008年8月、所収）の翻訳である。これは、1950年代中国を代表する詩人・郭小川（Guo Xiaochuan）を対象とした論考なのだが、詩人としての文学的営為を直接的に論じるのではなく、従来さほど注目されてこなかった郭小川のもう1つの顔、即ち、中国作家協会の秘書長（事務局長）という、いわば「文学官僚」としての側面にスポットを当てている点に、独特の面白さと意義を見出せるように思われる。当時の文学者たちを取り巻く政治的磁場を明らかにすると同時に、新たな郭小川像をも描出し得ているのではないだろうか。

作家協会（以下、作協と略称。1949年の創設当初は文学工作者協会との名称だったが、53年に名称変更する。機関誌は『人民文学』）とは、中華人民共和国建国後、社会主義国の「兄貴分」であるソヴィエト連邦におけるソヴィエト作家同盟をモデルとして創設された、作家たちを組織するための機関である。作家の文学的生活（生活保障から文学活動、即ち、執筆から雑誌掲載・出版に到るまでの作家活動の総体）を援助すると同時に、作家に対する思想教育やイデオロギー統制などを進めていく役割をも担っていった。周知のように1950年代中国では、作家・知識人に対する批判運動（「文芸思想闘争」とも呼ばれる）が幾度も展開されたが、作協そして郭小川は、まさに、その中心に位置していたのである。

ちなみに、文学者対象の作協のみならず、美術家協会・音楽家協会・戯劇家協会なども組織され、更に、こうした各協会を束ねる中国文学芸術界連合会（文連と略称。機関紙は『文芸報』）という機関も創設された。文連は数年に1回、全国文学芸術工作者代表大会を開催し、社会主義中国にふさわしい文学・芸術の創出に向けた活動の総括と方針を議論していく。社会主義中国においては、こうした形で文学・芸術の組織化が進められていた点には留意したい。このような機関ないし組織（化）が存在したからこそ、「文芸思想闘争」も展開し得たのだと言うべきだろう。

ところで、21世紀になって、『郭小川全集』（全12巻。広西師範大学出版社、2001年1月）が刊行されて話題になった。何故か。この『全集』には、郭小川が作協秘書長を務めた1957～59年の詳細な「日記」のみならず、郭小川自身が59年に批判されて以降の「自己批判書」の類（作協秘書長時代を回顧した内容も多い）さえもが収録されていたからである。従来、ほとんど明らかになっていなかった50年代の作協活動、とりわけ「文芸思想闘争」の内実を探っていく上で、極めて貴重な第1次資料となっていることは断わるまでもないだろう。事実、「日記」の一部を単行本化した郭曉恵・郭小林整理『郭小川1957年日記』（河南人民出版社、2000年7月）も出版されているのである。

ここで注意を喚起したいのは、この書籍そして本論考も、ともに「1957年」に注目している点である。理由は言うまでもなく、「反右派闘争」が展開された年だったからである。「反右派闘争」とは、ソ連のスターリン批判（56年）とも連動して展開された「百花齊放・百家争鳴」という一種の「自由化」政策に後押しされて出現した、党の指導や政府の政策に対して批判的な動向を、「資産階級右派分子」と認定して徹底的に弾圧した政治批判運動を指す。全国で「右派分子」のレッテルを貼られた人々は、何と55万人にも上ったのだった。「反右派闘争」以降は、若干の紆余曲折はありつつも、中国は、基本的には文革へと到る道をひた走るしかない

かったと言われている。その意味で、1950年代中国の大きなターニングポイントの1つでもあった。

本論考は、郭小川「日記」を丁寧に読み解く中で、「反右派闘争」が、作協内部では如何に展開されていったのかを、詳細に明らかにしていく。その作業は、同時に、「組織と個人」「政治と文学」の狭間で煩悶し思考する、文学者ないし人間としての郭小川の姿を浮き彫りにすることにも繋がっていくのだ。その意味で本論考は、従来、明らかになっていなかった歴史の内面と時代に翻弄される知識人の内面を描出した、極めて興味深い研究営為となっているように思うのだが、どうだろうか。

以下、郭小川の略歴を紹介しておく。

1919年9月2日、河北省に生まれる。詩人・文芸評論家。37年、八路軍に参加し中国共産党に入党。41年に延安に赴き、45年までマルクス・レーニン学院で学ぶ。48年より宣伝工作（文化・イデオロギー関係の業務の総称）に従事し、49年に党中南局宣伝処長、53年に党中央宣伝部理論宣伝処副処長兼文芸処副処長。55年10月より中国作家協会に異動し、作協書記処書記兼秘書長、56年12月より作協党组副書記に昇進（作協秘書長は一貫して兼任。なお、役職に関して一言付記しておく。「処長」は「局長」と「科長」の間の職位で、日本の官僚機構で言えば部長クラスに相当する。また、党役職と政府機関行政職が混在ないし一体化している点にも留意しておきたい）。56年より作協理事、57年より『詩刊』編集委員。だが、59年に展開された「右傾批判運動」において、遂に作協「重点批判対象」として批判されるに到る。62年、『人民日報』社へ異動（特約記者）。文革中も批判を受け続け、「四人組」逮捕（76年10月6日。文革終結の起点）直後の76年10月18日、事故（煙草の不始末による火事）により死去。著名な左翼的思想評論グループである「馬鉄丁」（陳笑雨・張鉄夫との3人で構成）の一員でもある（郭小川個人の筆名としても「馬鉄丁」を使用している）。主な詩集に、『平原老人』（50年）、『投入火熱的闘争』（56年）、

『致青年公民』（57年）、『雪与山谷』（58年）、『鹏程万里』（59年）、『月下集』（59年）、『兩都頌』（61年）、『甘薯林——青紗帳』（63年）、『崑崙行』（65年）などがあり、長詩『將軍三部曲』（61年）も刊行されている。他に、評論・雑文集『針鋒集』（58年）などがある。

最後に、本論考の著者について紹介しておく。

李潔非（Li Jiefei）氏は、1961年安徽省生まれ。1982年に上海・復旦大学中文系を卒業した後、新華社や中国芸術研究院で編集者の仕事に従事しながら文学批評を執筆し始め、90年代に入ってから、中国社会科学院文学研究所に異動して現代文学研究に専念している。現在、文学研究所研究員（大学でいえば教授に相当）。主な著書には、『小説学引論』『中国当代小説文体史論』『解讀延安：文学、知識分子和文化』などがあり、特に近年は、「文学に関わる人物研究」に力点を置いているとのことだ。今回、力作を翻訳できる機会を得て、うれしく思っている。なお、李潔非氏と同じ文学研究所に勤務している中国人の友人を通じて、今回の翻訳に関する李潔非氏の同意は、すでに得ていることを付記しておく。

また、本論考に関連する拙考には、『『文芸思想闘争』の実態に関わる研究の現在——李向東・王増如『丁陳反党集団冤案始末』の紹介を兼ねて』（『野草』第84号、中国文芸研究会、2009年8月）があることと、「日記」を活用しながら「反右派闘争」期を中心とした郭小川を描いた論考の嚆矢として、陳徒手「郭小川——党組里的一個和八個」（陳徒手『人有病 天知否——1949年後中国文壇紀実』人民文学出版社、2000年9月、所収）が存在することを、最後に指摘しておく。

以下、「作協秘書長的1957」の翻訳「中国作家協会秘書長の1957年——詩人・郭小川のもう1つの顔」を掲載する。なお、〔 〕内は訳注である。人名訳注の役職名などは、1957年当時のものに限っている。

\*\*\*\*\*

## 1.

1957年は、中国の同時代文学史において、特別に重要な時期の1つである。

この年、郭小川は、中国作家協会〔以下、作協と略〕秘書長〔事務局長に相当する〕の仕事を担当して、すでに3年目であった。彼は1955年の9・10月頃に、陸定一〔中国共産党中央委員会宣伝部長〕・周揚〔著名な文芸評論家。党宣伝部副部長・作協副主席〕の推薦で、党中央委員会宣伝部〔宣伝部はイデオロギーや文化の分野を統括する。以下、中宣部と略〕から異動してきたのだった。当時、周揚は彼に会って話した際に、「陸部長は君の戦闘力を高く評価している、だから君を作協に派遣して作協活動を強化したのだ」と語っている。

彼は、肩に重責を負っていた。1957年に到ってこうした戦闘力に対する必要性が、ますます鮮明になってきた。

郭小川には日記を書く習慣があり、かつ1955年下半年から59年の間は、その記述が最も詳細な時期だった。この期間とはまさしく彼が、作協の「全体管理」の責任を履行する時期から、「誤り」を犯したことにより窓際に追いやられた時期までに相当する。2000年に出版された『郭小川全集』は、第8～10巻に全ての日記を収録している（ただし部分削除が存在するのは疑いないが）。日記の主が担った役割の関係から、同時代文学史におけるこれらの記述の持つ意義については、改めて言葉を費やす必要はないだろう。この日記は、生き生きとした、直接的かつ現場的な資料であり、よりよい整理と使用が求められている。

この文章が試みることは、おおよそこうした「整理と使用」に属することである。1957年の特殊性に基づき、筆者は、まず範囲をこの年度に限定した。私は日記に基づいて、異なる方面から郭小川のこの1年間の状況を復元していく。このことを通じて、我々は、彼の仕事や創作を理

解し、更には彼の生活と内心世界をも理解していこう。

## 2.

この年、9月2日になって、郭小川はようやく満38歳になるのだった。その意味では、彼はまだ1人の青年と言うべきだろう。身体面でも若者らしい状態を保持しており、日記にも、汗まみれになってバドミントンをするといった活力にあふれた情景が、幾度となく記されている。だが、その後更に2年が過ぎると、若者のような様子にあふれた状況は、もはやまるっきり失われるのだった。

とはいえ、彼の体には、年齢には不釣合いな予兆や感触がすでに出現していた。1月31日は大年初一〔旧暦の正月〕で、この日、彼は「体に多くの不具合なところがある。実際、少し老け込んだ感がある」と記している。前日には、理髪に出向いて「額の上に2つの小さな禿」を発見し、「年齢は確かに重ねてきた。少し今昔の感がある」と慨嘆している。9月1日、まさに38歳の誕生日を迎えんとしている際にも、彼はますます「老年に近づく」感覚について記しているのだ。

これは実のところ、37・8歳の人間が持つべき心理状態ではないだろう。いわゆる体の不具合の中で、風邪といった正常な小さな病気などを除いて、幾つかの現象は不正常か、現われ方が早過ぎる。彼がしばしば言及するのは、息切れ（呼吸ができない）、強烈な頭痛、心拍数の加速や嘔吐である。更に、症状のない衰退感は随所に看取できる。「疲れてだるい」「疲労困憊が著しい」「疲労の極致」といった類の表現は絶え間なく続く。7月8日を例に取れば、「正午、昼寝〔当時の中国には午睡の習慣があった〕で眠れず、疲労の局地。4時過ぎに〔執務室に〕戻って10分寝る。会議は5時過ぎまでだが、すでに耐え切れないほどの頭痛。」「戻ると、今度は『文芸学習』の雷奔〔編集者〕が来て原稿依頼。対応する元気もなくなっ

ている。」「物も食べたくない。食後、笑雨〔陳笑雨。文芸評論家。文連機関紙『文芸報』副総編集長。郭小川と共同で「馬鉄丁」の筆名を用いて批評活動も展開した〕の執務室で30分休む。戻ってから約1時間横たわるが、依然として体調不良。」「10時、すでに疲弊極まり、すぐにベッドに横たわる。シーモノフ〔ソ連の作家・詩人〕の詩を幾首か読む。』彼の場合、こうした酷い状況がたまに現れるというのではなく、度々出現して日常茶飯事となっていたのだった。

彼が老境を嘆くことが増えていくことは、気にしすぎて誇張があると見るべきではないだろう。彼の身体における上述の現われは、実年齢より、十数年の前倒しがあった。

健康がよくないことが火を見るより明らかな信号が、睡眠の質の低下だった。以前からあった不眠症の持病が、作協に来て以降、酷さが増した。日記を見てみると、彼がじっくりと安定した睡眠を得た時が極めて少ないことが看取できる。彼のこの若さで、睡眠導入のために処方された薬に依存しなければならず、しかも薬を飲む量も増大する傾向を呈していたのだ。眠りは、彼にとってすでに満足ではなく、大多数の場合、文字通りの苦しみだった。寝つくのも難しい上に、ようやく眠りに陥った後も悪夢に苛まれることが頻繁だった。見る夢は多種多様で奇妙奇天烈だったようだ。夢の中で詩の言葉や小説を構想したり、自分が病気で入院することや逝去した父親と会うことを夢見たり、また誰かに「闘争」される〔政治的に厳しく批判されることを指す〕ことを夢見たりする。……彼は一晩中、次々に登場する雑然として筋の通らない夢に夜明けまで付き纏われ、また、しばしば驚いて夢から醒めて、真夜中に起きねばならないこともあった。「ああ、睡眠とは実際のところ、一種の刑罰だ。」彼は、深夜の憂苦の味わいを思い起こした際に、このように述べていた。

こうしたことが純粹に身体的原因のみによってもたらされたとは、やはり言い難い。日記には、彼が体調不良のために病院へ検査に行ったが、

原因は基本的に何も発見されなかったとの記載が、数箇所にわたって記されている。血圧も下が80、上が120と極めて標準的な正常値だった。3月期には北京医院〔当時、最高レベルの病院と言われていた〕で診療を受けてはいるが、医師は、彼には「臀部神経根炎」があると述べるのみだった。この病気と息切れや嘔吐・頭痛などとは、きっと何の関係もないに違いない。

おそらく心理・精神上のストレスが占める比重が、ずっと大きかったのだろう。私は、偶然の一致とは見なすべきではない1つの現象に気づいた。仕事をして酷く疲れたり極めて処理のしにくい難題に直面した際に、彼の睡眠と体調の不良感覚は、より激しいものになっていく。これに反して、彼の日記では、こうした仕事に関連する言及を見出すことがかなり少なくなっていくのだ。

精神の状況が、身体感覚を直接的に連動させた、極論すれば、決定し続けていたと言うべきなのである。1957年の日記を通読すると、郭小川は、年頭から4ヶ月間の精神状態が最も悪い。5月はその季節の自然のように、唯一、春風が頬を撫でるような愉快で伸びやかな時間が流れたが、6月からは、精神状態は再び徐々に平穩を失っていき、その後はよかったですり悪かったりを繰り返しながら年末へと到っている。

上述した精神状態の起伏や変化の軌跡は、彼の仕事の内容に、その根拠を求めることは容易である。1月から4月とは、丁玲・陳企霞問題の再審査の結論〔1955年上半期、作協は、著名な女性作家で作協副主席でもあった丁玲と文芸評論家で『文芸報』副主編を務めていた陳企霞に対する批判を展開し、同年9月、「丁・陳反党集団」との結論を下した。だが、丁玲・陳企霞は納得せずに上訴、中宣部は「調査組」を組織して再調査を進め、「反党集団ではない」との結論を導く。作協内ではこの結論に対する異論も存在し、1956年末、郭小川は、作協秘書長として、この問題の結論文書を執筆するように命じられる〕を起草することに着手している期間だっ



た。この間に7・8回ほどは原稿の書き直しを命じられ、各方面からの圧力や切迫を受けて、筆舌に尽くし難い苦しみを味わっていたのだ。4月下旬に、どうにかその作業も完結する。5月は、「苦役」の終了に「鳴放」〔百家斉放・百家争鳴の略。1956年から展開され始めた「自由化」政策だが、57年になって急激に浸透する〕の展開が加わって、郭小川個人も散漫で平凡な1ヶ月を迎えている。心理状態もかなり和らぎ、症状も全て消え去った。以前には、基本的に毎日一言は書き記していた、なかなか寝つけないという現象にもほとんど言及がなく、逆に、「幸せだ」「ああ、もしも私がこのように暮らし続けるとすれば、何と愉快なことだろう」「私は本当に楽しさを感じている」といった類の日頃は見かけない記述が出現している。6月8日、『人民日報』に社論「これはどうしてなのか」が発表され、「右派に反撃せよ」という突撃ラッパが響きわたる。郭小川は、これに対し欣喜雀躍する。だが、情勢が彼を興奮させると同時に、「闘争」を基本内容とする仕事も緊迫し忙しくなっていく。作協秘書長としての負担も当然ながら重く、次々に展開される具体的「闘争」活動を組織し手配する仕事の他に、自分自身も武装して戦場に赴かねばならなかったのだ。その中では、力量不足が否めない出来事も数多く存在した。例えば、馮雪峰〔文芸評論家。作協副主席で『文芸報』主編〕を批判する発言では、彼はかなりの気力を費やして準備したが、結果は、歴史〔過去の実情〕に対する無理解からしくじり、揚げ足を取られてしまったのだ。彼は再び焦り出す。日記にも、以下のような叙述が次第に多く出現して来る。「11時に寝る。だが眠れず、起き上がって詩を書く。12時半にまた寝る。」「11時半まで話して、帰宅時間はすでに12時だった。入浴したが、長い間、眠れない。」「11時まで仕事、多く眠らねばと思うが、どうしてもちゃんと眠れず。」「11時半まで、長い間、寝つけない。」「発言の準備をする。だが、多くの事柄、様々な言い方がある、簡単には重点がつかめない。気持ちが酷く焦って苛立つ。」「やはり眠れない。このように緊張して眠

れず。本当に不快にさせる。」「11時半に横になる。1時頃、雷雨が激しく、長い間、眠れず。」「夜、いつも丁〔玲〕・陳〔企霞〕・馮〔雪峰〕の夢を見る。よくは眠れない。」「長いこと寝つけない。これは全く一種の絶望の感情だ。」「私を苛立たせる感覚がある。作協では本当に働きたくないようだ。」「……激烈な「闘争」は、仕事の負担を加重させただけでなく、危険なことに自宅の「裏庭で失火」を起こさせたのだ。——夫人・杜恵は北京東郊で整風運動〔党員の思想・活動のあり方を点検・是正するために実施される政治運動〕に参加し、「大衆の中で、幾つかの扇動的な発言を行なった」のだが、年末の頃には、東郊区の党委員会は彼女に対して批判を展開しようとしており、彼女を「右派分子に画する趨勢が存在した」のだった。郭小川は、ひどく驚愕し怯えて、知人を通してとりなしを頼み、どうにか右派の帽子〔右派分子のレッテル〕をかぶされることは免れたが、郭小川の精神に、巨大な恐慌をもたらした。「これは最も悩み煩う1日だ。」「ここ2日間、気分は苦悶だ。」12月30日、1957年に別れを告げるとき、彼は、「心臓の具合もよくないようだ。気分が滅入る」と記している。

### 3.

個人の創作と職務・仕事との間の矛盾が、郭小川の焦慮を生み出す重要な原因の1つだった。

文学を熱愛していたとはいえ、作協に異動して来る以前は、郭小川は、主として1人の行政幹部だった。だが、彼が作協の職務を引き受けるにあたって、実際に考慮したことの1つは、こうした環境を利用して自己の創作を進展させることができるだろうということだった。行政組織が彼を作協秘書長に就かせたのは、まさしく彼の行政能力を重視したからだった。彼は、行政上で役割を果たすところに、主要な期待が寄せられ

ていたと言ってもよいだろう。双方の期待における相違が、後に衝突する導火線となるのである。

作協に異動してきてから、郭小川の詩歌創作はめざましい進展を遂げ、すでに重要な詩人としての地位を確立していた。1957年とは、よりいっそう力を蓄えて一気に爆発させていく1年であり、連続的に長編叙事詩を書き上げている。これらの作品は、悲劇性・衝突性に対する探索意識を遍く表出しており、当時の詩壇における鋭い進取と突破性に富んだ代表作であり、郭小川が、自己の詩歌の最高峰に迫ろうとしている状態を示していた。

全ての創作者は、自分が如何なる状態に位置しているのか、という点に対して、内心では非常に鋭敏である。絶え間なく沸き起こって制止しようがない創作の激情から、郭小川は、自分の創作が満開の時節を迎えていることを自覚していたと、私は確信している。だが、彼にはインスピレーションの不足はなかったが、時間に欠乏していた。そして1957年は、折悪しく多事の年であり、このことが彼に進退を窮まらせ、仕事と創作の間で矛盾が頂点に達するのである。

彼は、態度は断固たるもので、仕事のために創作を譲歩させるつもりはなかった。

1月から3月の間は、丁玲・陳企霞問題に関する「結論」を起草する、最も苦難に満ちた段階であり、進展の緩慢さと問題自体の複雑性、及び多方面で繰り返される折衝と文章の書き直しなどが続くが、我々は日記から、全く別の事実を看取できる。机に向かって行なう作業の内容からみれば、郭小川が詩を書くのに費やした時間は、職務である「結論」を執筆する時間よりも多いのである。この期間に、彼は「致大海〔大海に送る〕」「深深的山谷〔深い溪谷〕」の2首の詩を創作し、更に改稿して完成させている。特に「深深的山谷」は、当時は「書いてきた詩の中で最も長い1首」で、費やした時間は非常に長く、書いては改める作業は丸々

3ヶ月を越え、3月23日に原稿が完成して『詩刊』に手渡した。だが、まだ完結ではなく、4月2日にゲラを受け取った後に再び大幅な改稿を施し、新たに24行を書き加えた上で、4月5日にゲラを『詩刊』に返している。「深深的山谷」は、ここでようやく最後の句点が本当に打たれたのである。

引き続き、昆侖山を題材とした詩を構想し始める。そして5月、驚くべきことに、「昆侖山の演説〔昆侖山の演説〕400行と「一個和八個〔1人と8人〕」1200行を書き上げているのだ。前述したように、この5月こそ、この1年間で郭小川の体調をめぐる感覚が最も平穏な時期だったが、創作の角度から見てもそのことを証明している。彼の日常における様々な不都合が、悩みや気がかりとして現われ出ていることを、少し知るべきなのだろう。詩を書く時間に余裕があり、かつ執筆が順調に進んでいるときは、全ての疲労や痛み、煩わしさなどはことごとく消散しているのである。

「一個和八個」は、郭小川の一生において、規模が最も大きい作であり、「17年」〔1949年の建国から66年の文革勃発に到るまでの時期を指す〕の革命歴史題材における全ての叙事詩創作で、1つの里程碑となった作品である。3月8日、全国宣伝工作会議小組会〔分散会〕の討論の場で、老舎〔著名な作家。作協副主席〕や茅盾〔著名な作家。作協主席〕が、「悲劇」を描いてよいかどうか、どのように「悲劇」を描くかという問題を提起したのだが、それは郭小川への触発が極めて大きかった。彼は、当日の日記に、「問題は、作者がもし1人の共感に値する人物を描く際に、彼を失敗させて死に到らしめることができるかどうか、という点だ」と記している。実は、この触発には、期せずして一致した性質が含まれていたのだ。その直前、「深深的山谷」において、郭小川自身が、革命闘争中に個人の欠陥によって哀れな運命に行き着く矛盾・衝突を表現してみようと、すでに試み始めていたのである。老舎や茅盾が語ったことは、彼の

更なる思考を促し、彼が「悲劇」を書く意識を明確に変化させ始めたのだ。従って、後に書いた検討書〔自己批判書〕の中で、彼は回顧して、「何故こんな代物を書いたのか。明らかに当時の気分と切り離すことはできない。これ以前に老舎は、再三にわたって、『我々のこの時代の悲劇には、如何なる法則があるのか』という問題提起をしていた。更に彼は、悲劇に関する文章を書いていた。私自身は、3月8日の全国宣伝会議において、老舎と茅盾の発言を聞いた後に、(私の日記において)1つの問題を提出した……。」(「在反右派的鬭争前後——我的初步検査之十〔右派に反対する鬭争の前後——私の初步的検討の10〕)と書いている。4月24日、構想を練っていく過程で、彼は日記において、この詩のために主題を定めた。「私は、1人の揺るぎない革命家の悲劇を書くつもりだ。」このような主題は、当時では突破性を備えたものだった。大いなるユーモアとしか呼べないのだが、革命歴史題材の中に敢えて悲劇の視角を入れ込んだことにより、この作品自身が、着実に悲劇的な運命へと陥ってしまうことになったのだ。実際、郭小川の生前には、この詩は発表される機会を全く得ることができなかった。書き上げた直後に『人民文学』『収穫』などに渡したが、悉く挫折した。11月と12月、郭小川はそれを2度ほど改稿を行ない、再び『詩刊』に送ったが、またもや棚上げされてしまう。その後、周揚に渡して、審閲して意見を聞かせてほしいと望んだが、意見に関しては、結局、何も示されなかった。だが、1959年に郭小川が批判される時期に到って、ようやくこの詩はタイプ印刷され、「内部批判」を進めるべき証拠とされたのだ。その後、80年代の初めになって、北京電影学院のいわゆる「第5世代監督」〔文革後世代の監督。具体的には張軍釗を指す〕が、それを改編して同名の映画〔1983年上映〕を制作したが、その際でも依然として審査は紆余曲折をたどった。1957年に郭小川がこうした作品を創出したことが、如何に「先駆」的であったかが看取できよう。

1959年の批判では、「一個和八個」に対して、もう少しで「反党」とも言うべき、あんなにも大きな帽子をかぶせた〔レットルを貼った〕のだ。事実、この作品は、革命歴史題材の創作において、人物と物語をさほど単純化せずに処理しようと少し試みたに過ぎず、基本的に言って、そのイデオロギーには一切の問題はない。かなり正統的で、その作者のように「異端」の色彩は皆無なのである。郭小川が、このことに対して気を病み、深く傷つけられたと感じたのも無理はない。

彼が傷つけられたと感じないことが、どうしてあり得るだろうか。1957年の創作を見渡せば、彼は「深深的山谷」「一個和八個」「白雪的頌歌〔白い雪の頌歌〕」などの作品において、革命主題に対する新たな取り扱いを試み探索しようとしていたとはいえ、だが、「同志たち」は一点のみを批判して、その他を無視しているのだ。その年のその他の創作を見よう。反右派の運動が起こった後、彼は本心から感激して、7月中の闘争があれほどまでに緊張し多忙な際にも依然として筆を執り、反右派の詩である「星期天紀事〔日曜日の記録〕」と「射出我的第一槍〔私の最初の銃を発射する〕」を書いている。特に後の1首は、題材を把握するのが難しいことから順調に書き進めず、遂には無理やり書いていく（「書くほどに不満が募る。この詩は本当に難産だ」「詩を書くのがダメになっている。数時間を無駄に費やす。本当に難しい」）。わずか200行ほどで時間ばかりが経っていくが、彼は、依然として旺盛な政治的情熱を発揮してそれを完成させた。詩の中には、以下のような「懺悔」がある。「人民よ、我が母よ。私はあなたに謝罪しなければならない。……私の階級的な眼は惑っていたのだ。……悪人が最初に毒々しい笑い声を発したとき、私は鋭い剣のようなペンを掲げ、あの分厚い腹の皮を引き裂いて、あの毒臭い心臓をほじり出しはしなかったのだ。」「今日——右派分子が、まだ全力で必死に足掻いているとき、この憤怒と慙愧によって震えている私のこのペンで、私の最初の銃を発射する。」8月末から9月初、再び反右

派を題材とした組詩「発言集」を書いている。内容はタイトルと同じく、あの時代としっかりと結び付いている。それは作者の、その年の夏季全体における、絶え間なく「発言」し闘争参加した真実の姿だった。組詩の中の小題も、多くは「反党分子に狙いを定める」「我々の党を防衛する」といった類だが、「私があなたたち——30年前後の党歴を持つ老党员たちに狙いを定めたとき、正直に言えば、私の心は苦しく慄いた。……あなたたちと戦闘することは、骨を削って毒を直し、刃が入り込んで切り分けると、汗が1千滴1万滴と流れ落ちるだろう」といった詩句は、特定の意味においては、「真情・実感」を失ってはいない。「30年前後の党歴を持つ老党员たち」が「反党」へと歩む1歩は、郭小川の今回の闘争における感慨に堪えない部分だったようだ。丁玲・馮雪峰は、ともにこの条件に合致する。このため彼は感情が平穏ではなく、「発言集」を書き終えても、「更に1組の詩を書きたい。丁玲・馮雪峰・艾青〔詩人〕・蕭三〔詩人〕などに向けてそれぞれに分けて書く。この詩で彼らの基本問題を指摘するのだ。ここ数日の内に書き始められることを望む」と記した。この思いに基づく新たな組詩は、実現してはいない。だが、ここから垣間見られることは、郭が反右派に対して真情を動かしていること、彼が心より党を愛し、「反党」の人々のために苦しみ悲しんでいる姿である。当初の計画では、更に「1957年夏天在中国〔中国における1957年夏〕」を書こうとしたようだが、「困難が多過ぎて、敢えてそれに挑もうとはならなかった」ことから、また、自分自身さえも「反右派闘争の詩はすでに数多く書いてきて、今は本当に書きたくなくなった」と思うようになり、しばらく捨て置いて「年末にはそれに関する詩集をまとめる」という心積もりになっていく。——年末に到ると、また、書きたい別の「新たな事物」が生じてしまい、この詩集は、遂に顧みられることはなかった。

郭小川の創作には、一種の奇妙な二面性が存在する。

1つは、政治・思想面において、時々的情勢・状況に密接に付き従い、

党の活動方針、特に「闘争」の新たな必要性に対しては、積極的に共鳴し役割を果たすのである。なおかつ、日記の記述を見る限り、こうした共鳴や参加は迎合的な行為ではなく、心からの自発的なものなのだ。上述した反右派題材の創作以外にも、〔ロシア革命の〕十月革命勝利記念日にも彼は詩を書こうとしているし、『人民日報』が国慶節祝賀のための詩を依頼した際にも、当然引き受けるべきだと感じている。9月26日、彼は日記にこう書いている。「(国慶節祝賀詩について) 長時間、構想を練っているが、どうしても結果が出せない。十月革命節を記念する詩を書くために、どれほど眠らない時間を費やしたことか。だが、国慶節のために詩を書くこと、これは実に神聖な義務なのだ。」10月15日には、突然、突飛なことを思い付く。「私は、『莎菲女士日記〔ソフィー女士の日記〕』〔反右派闘争における批判対象である丁玲の代表作〕の続編を本気で書きたいと思う。——これは意義ある仕事ではないだろうか。」そう考えたのは、おそらく反右派闘争の実態から出発して、「莎菲女士日記」に対して、丁玲に反対するためにこれを用いようとしたのだろう。この思い付きは、彼の真面目さによるのだ。彼はその2日後、わざわざ王府井書店〔当時、北京で最大の書店〕に出向いて『丁玲短篇小説選』を購入し、その日はもっぱら「莎菲女士日記」を読んでいるのである。彼はかつて日記で、政治的観点から詩壇に対して厳しい批判を呈していた。「私を奇妙に感じさせるのは、多くの人々の詩が、党に対する不満をこっそりと表しており、肅反〔反対分子への批判運動〕や三反〔官僚主義などに対する批判運動〕に対して自己の尊大さを表明することだ。朱丹〔詩人〕の『海』でさえもがこのようで、私には理解できない。『あなたがどのように攻撃するかに任せた私は、やはり大したものなのだ』が1つの普遍的な主題となったが、知識人の個人主義がここに見て取れる。」1年余り後に、自分自身がまさにこのように厳しく攻撃されるとは、彼はどのように予想できたのだろうか。年末には、反右派闘争後期に、党は作協幹部を下放労働〔知識



人が農村で労働し農民に学ぶことを指す〕へ送ることを決定したが、郭小川はこれに対して詩情が高まり満ち溢れ、11月中旬から「幹部が農村へ行き労働する詩を1首書く」ことを構想し、まだ書き始めてもいないのに、すでに「延安の粟を食べて、美しい娘たちが豊満になった」といった詩句が思い浮かんでいた。彼はこうした題材のために、誠実に思いにふけり言葉に酔うのだった。タイトルも、「下去吧、朋友〔農村へ行け、友よ〕」から「送幹部下郷の詩〔幹部が農村へ行くのを送る詩〕」、更に「送同志們〔同志たちを送る〕」へと3度変更したが、「3つとも、いずれも最初から不満」であり、実際は明らかに、文のために情を創るという「本末転倒の膠着状態」に立ち至っているのに、何度も自分に言い聞かせているのだ、「幾晩か寝なくとも、必ず詩を書き上げなくてはならない、これは何と重大な政治的任務であることか」と。

もう1つは、たった1人で「文学」と向き合う際には、彼は、芸術面では寂しさには甘んじない心情を感じ取っており、新鮮な事柄に容易に惹き付けられて、自己の創作においても、常に幾つか新しさを打ち出そうとすることである。1957年下半年には、彼のこうした二面性が、とりわけ存分に現われている。

「星期天紀事」「射出我的第一槍」「發言集」「送同志們」といった作品を書くと同時に、彼の胸の内では、別の興味・関心も流れていたのだ。9月から12月にかけて、多大なエネルギーを費やして、「一個和八個」に2回もの大きな改訂を施し（一旦は詩名を「囚徒〔囚われ者〕」と改めてもいる）、同時に、新たな長篇叙事詩「白雪的頌歌」を創作している。文革期に自己批判を行なった際に、彼は「白雪的頌歌」はショーロホフの「人間の運命」と「開かれた処女地」第2部の影響を受けたことを認めている。「この2つの作品は、私は、出版されてすぐに読み、すばらしいと考えた。一時猖獗を極めた『写真実論』『真实描写論』。百家齊放期に主張された、現実に存在する矛盾に眼を向けて文学に画かねばならないという議論。

反右派闘争期には右派の主張として批判される]は、私に重大な影響を及ぼした。」(「在両条路線闘争中——關於我解放後17年来的基本狀況〔2つの路線の闘争において——私の解放後17年間に關する基本的狀況〕」)日記を調べてみると、3月31日に、「夜、ショーロホフの『人間の運命』(短篇小説)を読む。これは心を揺さぶる作品だ。そこには、自動車の運転手の人生体験が叙述されている。彼は俘虜にもされた。粘り強いが、またひどく不幸なのだ」と記している。明らかに、革命的な原則を持つだけでなく人間性による胸のときめきもある、ある種の「微妙な感覺」であり、彼の共感を引き起こしている。そこで、「私はこのような物語が書きたいのだ、共産黨員が如何に愛情生活を処理しているのか」「1組の夫婦の政治面と愛情面における貞節を賛美する」とも述べるのだ。革命的な立場に立って、人間性と人情味に対してこの種の秋波を送ることは、資産階級へ向かうドアの隙間に、容易に音もなく滑り落ちていくことにもなっていく。彼が後に自己批判しているように、「白雪的頌歌」のヒロインは、「結局のところ、1人の解放戦争に対して感傷的情緒を抱いた資産階級的個人主義者であり、彼女は、仕事中大衆闘争中かを問わずいつでも孤独を感じており、行方不明の彼女の夫と幼い子供のことだけを考えているのだ。更には、ある医師に対して曖昧な感情をも抱いている。」(「在両条路線闘争中——關於我解放後17年来的基本狀況」)確かにこの物語の中には、幾つかの小さな秘密が埋め込まれていた。10月24日の日記は、「この女性は実は私自身なのだ。これは真実の体験と言うべきだろう。心情は私のもので体験は蕙君のものだ」と吐露している。蕙君とは、夫人・杜蕙の愛称である。1947年、郭小川は、豊寧県で敵との闘争〔国共内戦を指すのだろう〕を展開しており、杜蕙母子とは離れ離れで一時は連絡を取る術もなかったのだが、その時期は息子・郭小林が生まれたばかりだったのだ。「真実の体験」とは、この時期のことを指すのだろう。「心情は私のもので体験は蕙君のものだ」とは、プロットは杜蕙の身に生

じており、郭小川は自己の感情を移動させて、詩の中では、妻のこの時期の体験に新たな感覚を入れ込んだということである。

人間を如何ともし難くさせる一種の現象が、最も革命的な時代においても、「資産階級」的なヒューマニズム論や人情味といった事柄が人間の胸を打つということだ。「白雪の頌歌」は、改稿段階では非常に良い反響を感じていた。多くの文壇の同僚や編集者たちが好感を示したが、とりわけ女性読者の反応が強烈であり、彼女たちは皆「いたく感動した」。作協の1人の女性勤務員は、「読んで以降、ほぼ午前中いっぱい泣いていた」ほどだった。

こうしたことが郭小川に、この詩に対する空前の自信を抱かせた。12月11日、最終稿を仕上げた際に、彼は「これは本当の傑作かもしれない。人々に判定させよう」と記している。

1957年の最後の日、彼は1年の創作を振り返って、総括的に「この1年に6000行の詩を書いた。だが、更に2500行のまだ未発表や改稿中の詩がある——これこそが『一個和八個』と『昆侖山』だ」と記している。2度の改稿を経て「一個和八個」は、元々の1200行から1800行へと拡大していたのだ。「今年は収穫のあった1年だった。」彼は最後に、こうした自己評価を下している。

#### 4.

作家研究に向けた有益な情報とは、政治・社会・思想・芸術・仕事といった分野に限らない。日常生活や暮らしに関わる情報もとても重要であり、時には、我々の問題に対する思考の推進に、普通ではない角度を獲得させるかもしれないのだ。

視線を郭小川の生活事情に向けた際に、私は、日記に記載された収入と支出に関わる内容に興味を抱いた。これらの内容は、私の彼に対する

理解をいっそう深化させると感じた。

当時の郭小川の月給は200元余だったが、我々がここで言う収入とは、給与以外を指す。原稿料と貯蓄・公債の利息という2種類の出所があったが、もちろん、主要なものは原稿料だった。

この1年間の記載は、以下の通りである。

1月11日、『西南音楽』〔雑誌〕の原稿料14元を得る。

1月19日、『中国青年』〔雑誌〕の原稿料160元（「官僚主義と小資産階級的偏激〔官僚主義と小資産階級的過激さ〕」の分で、長さは8000字）を得る。

1月23日、新影〔ニュース映画制作会社「新聞記録電影制片廠」の略称〕のナレーション原稿料500元を得る（半額を共著者に与える）。

2月分は4編の短文の原稿料のみで、各々20元から30元でまちまちである。この頃、彼は多くの短文を書いているが、おそらく額が多くなり、かつばらばらであることから、この後、記載は基本的には見かけなくなる。

3月は記載なし。

4月26日、「深深的山谷」の原稿料420元（504行）を得る。

5月16日、貯蓄の利息75元を受け取る。

6月は記載なし。

7月9日、「向困難進軍〔困難に向かって進軍しよう〕」が1冊の詩アンソロジーに収録されたことにより、原稿料225元を得る。

8月10日、『思想雑談選集』の原稿料1065元を得る。

9月は記載なし。

10月20日、公債と貯蓄の利息、計290元を受け取る。

11月17日、『中国青年報』〔新聞〕の原稿料80元余を得る。

12月、詩集『致青年公民〔青年公民に送る〕』が出版されるが原稿料の額は不詳。翌年の日記も調べたが言及がなく、記入漏れと見なすべきだろう。詩集の印刷部数は17000冊なので、原稿料はおそらく5、6000元

前後である。

以上、原稿料だけで、合計すると約8000元近くとなる。

1950年代は中国の物価は低かったが、一般的に言って、職員・労働者の給与水準も高くはなかった。私の父親は1958年に大学を卒業後、月給は59円で、文革終結に到るまで一切の変動がなかったのである。一般労働者の月給はおおよそ3、40元に過ぎなかった。従って、当時の一般の都市居住者と対比すれば、郭小川のような著名な作家は、収入がかなり良いと言うべきである。彼が「収獲のあった1年」と称した1957年は、個人の全収入（原稿料・給与・利息の合計）は、当然ながら1万元を超えているだろう。これは驚くべきことだ。改革・開放後の1980年代初めに、「万元戸〔家族の合計年収が1万元の一家〕」が出現して広範な注目を集めたことを、人々はやはり忘れるべきではないのだ。

郭小川の収入を分析すると、原稿料が占める比重が最も大きい。確かに今日と比べると、あの頃に文学に従事することは、政治的圧力はかなり大きかったとはいえ、しかし実利について言えば、名声と利益の両面において、その地位を手に入れるには意味があったのだ。文壇において抜きん出るとは、収入が極めて豊かになることを意味していた。郭小川のように、詩と雑文を書くことを主としている場合、原稿料収入は、当時でも中位に過ぎない。もしも小説を書けば、1冊の長篇小説の所得は、1人の一般的な労働者の100年分の給与に匹敵しよう。張僖〔作協副秘書長。文学者ではなく中宣部官僚として派遣されていた。反右派闘争で批判される〕は、「あの頃は全面的にソ連に学んでおり、あらゆる分野でソ連をまねていた。原稿料もソ連に学び、基本稿料に印刷部数稿料を加えた方式を採用し、かつ定められた標準がかなり高かった。楊沫の『青春之歌〔青春の歌〕』、梁斌の『紅旗譜』、柳青の『創業史』、曲波の『林海雪原』などが該当する。あの頃は本の種類が少なかったので、どの本も印刷部数が膨大で、しばしば1冊の本で、5、6万元あるいは7、8万元の

原稿料を手に入れることができた」(『只言片語』)と回想している。

当然ながら、こうしたことは、相当に豊かな生活方式をもたらした。支出面では、各種の「最先端」的な消費行為を反映している。私はかつて、郭小川日記の1つの不可思議な事情を見出したことがある。1956年のある日曜日、郭一家は陶然亭公園〔北京市宣武区にある公園〕に行き遊んでいるが、わずか数キロの道程を往復するのにタクシーを呼んでいるのだ。中国の一般都市居住者がタクシーを利用し始めるのは、1990年代初めに広範に出現した現象である。郭一家のこの日曜日の享受は、少なくとも30年間を先取りしていた。

支出面に注目することで、我々は視線を、彼の家庭生活の細部へと伸ばしていくことができる。中国の大多数の家庭では、支出を細かく計算し節約をしないわけにはいかない際にも、郭家では支払に対して如何なる顧慮もしていないように見受けられる。日記からも、かなり額の大きい原稿料が入る度に、基本的にすぐに使い切っている様子が見て取れる。夫人・杜恵は、現在の流行に敏感な女性と同様に、服装と買い物に熱中している。郭小川はあまり賛同してはいないのだが、如何ともし難かった。結局、かなりの収入がそれを支えたのだった。

杜恵の購入対象は衣服だけではなかった。1月23日、郭小川は、「今日、新聞記録電影制片廠の原稿料500元を受け取る。…10時、杜恵が戻って来たのでこの件について話すと、原稿料は彼女の手握られ1分もしない内にいなくなってしまった。恵君は衣服を作り、更に榮宝齋〔瑠璃廠にある書画専門店〕で絵画を買いたかったのだ」と記している。榮宝齋での絵画購入だが、買ったのは複製品ではなく真筆で、しかも並の画家の作品ではなく齊白石〔清末から中華人民共和国期まで活躍した画家・書家。現代中国画の巨匠と呼ばれる〕の原画だった。月末に支出を総計する際には「出 齊白石などの絵画170元」と筆記されている。170円で齊白石の真筆を購入することは、値段が安いと言うより、当時の名のあ

る作家・文人は経済面でも突出していたことを、より明らかにしたと言うべきなのだろう。——容易に看取すべきは、このような価格で齊白石の絵画を買い入れることができるのは、彼の経済力が、一般人の購買する能力を遥かに超えていたからなのだ。

9月22日の記載は、杜恵が1つのインド象の象牙彫刻品に関心を持ったことを明らかにしている。結局、購入したかどうかは不明だが、このために夫婦の間が「またギクシャクし出した」のだった。大体の場合、日記を書くのは郭小川の苛立ちがまだ消えていないときで、説明を忘れていた。実は、長期に渡って見てくると、杜恵は高価な芸術品の購入が趣味であり、それを見分ける眼光も備えていたことがわかる。結局、ごく少数の人のみが値段や具合について質問する余裕があり、それ故に芸術品の収蔵に携わる敷居が高くなく、相対的に今よりも誠実でよい機会となっていたのである。

9月16日にもこのような記載がある。——今回は杜恵が金を使うのではなく、郭小川が自分のために裕の外套を誂えたのだ、息を呑む172元という大枚をはたいて。多言は要しないが、齊白石の絵画でさえも170元に過ぎなかったことを参考にすれば、この外套の費用は度を越えた額だと言えよう。

しかし、これらのことも、次の年の郭小川に一時的に生じた家を買おうという考えと比べれば、如何ほどのものでもない。南池子葡萄園〔故宮のすぐ東側の地域〕に住宅物件があり、2月28日に見に行つて以降、2つの点で感嘆している。1つは「家は本当に素晴らしかった」、もう1つは「やはり高すぎて買えない」だったが、それは持ち主が付けた売値が1万3800元だったからだ。当時、北京の一般的な小院〔小さ目の四合院〕の販売価格が1000元なので、もしも1万円を超えるとすれば、絶対に並大抵の物件ではないはずである。後の様子から見ると、「高すぎて買えない」というのは決して絶対的なものではなく、おそらく「買えない」と「買

える」の中間に位置していたのだ。何故なら、3月3日、郭小川は日記で「家を買うことを決めた」と表明しているのである。その後、4日、9日、24日と3回続けて家を見に行き、持ち主と交渉している。こうした行動は、もしも菌を食いしばって必死に頑張れば、物件の販売価格に近づくことができることを説明していよう。最終的には家は購入しなかったとはいえ、重要なことは、彼は表示価格が1万3800元の商品に対して、真剣に考えを巡らせることができた点である。私の知るところによれば、あの頃、一般の人は、一家の総力を挙げて節約をした後でも、購入に思いを巡らせることができたものは、100元程度を超えないのが最多だった。

本節の叙述は、収支決算書を書き上げたのに近いが、だがこれらの数字が決して無味乾燥ではないことは明らかだろう。私は、それが文学語彙よりもずっと生き生きとしたイメージを生み出してさえいると思う。これらの数字と前述の文章によって、郭小川の「今年は収穫のあった1年だった」を浮かび上がらせることで、我々がああした事情を理解することを手助けできるのだ。——少なくとも有益な1つの参照系であり、かつ、このことが我々の作家についての研究を「低俗」へと流れさせることなど決してあり得ないと、私は認識している。

## 5.

「闘争」とは、建国以来の文芸界にとって、確かに1957年だけが備えた特色ではなかったが、だが、1957年の「闘争」が特筆大書に値するのは間違いない。

郭小川について言えば、この年の「闘争」は、前後2つに分けられる。もたらされた忙殺と疲弊は似たり寄ったりだったが、感覚について語れば、違いが際立っていた。

前年末に彼は、1955年に批判が展開された丁玲・陳企霞に関する再審



査の結論を執筆する命を受けていた。1月から4月まで、この業務に専念し、身も心も開放されず痛苦を感じ続けていた。原因は、この「闘争」が非常に混沌としており、混乱して方向を見失わさせるからだった。もしも本人の態度を述べるならば、彼は日記の中で丁・陳が好きではないと明確に表明している。元々、彼が作協に赴任して秘書長を担当するようになったのは、1955年、まさに丁・陳批判が始まった時期にある発言を行なったことがあり、それが陸定一・周揚に、戦闘力があると認められたからだった。だが、彼がこの再審査の結論執筆を引き継いだ時期は、風向きが正反対になっていた。1956年に一旦緩んだ文化政策と状況の下で、丁・陳に対する批判にある種の疑問符が打たれ、情勢は批判に不利な方向へと変化しつつあったのである。だが、状況はそうだとしても、丁・陳問題をめぐる全く異なる意見は、その勝敗はまだ明確に決着してはいなかったのだ。一方は旗幟鮮明〔批判運動の誤りを認めよ〕だったが一方は部分的な譲歩のつもりだったので、煮え切らない事態が続き、甘んじて徹底的な敗北を認めようとはしなかったのである。この曖昧模糊とした局面で、郭小川1人の肩に、板挟みに遭って双方から恨みを買って、進退窮まった状況がのしかかったのだった。

4月末までのたうち回って草稿を仕上げ、どうにか提出はしたが、このために生じた苛立ちはここで過ぎ去ることはなく、1959年の彼本人に対する肅正にまで一貫して影響していった。だが後の話については、差し当たり言及せずにおく。

リラックスした5月を過ぎすと、あっという間に、この年の第2幕目の「闘争」がやって来た。

6月8日、『人民日報』は突然、社論「これはどうしてなのか」を發表して、『『共産党の整風を援助する』という名目の下、少数の右派分子は、今まさに共産党と労働者階級の指導権に挑戦している。中には、共産党は『政権を明け渡せ』と公然とわめき散らす者さえ存在する』と主張した。

郭小川日記は、そのキーワードを正確に把握した。——「今日の新聞で、整風における右派分子に初めて大規模に攻撃を加えた。」彼は、「願いが実現した」と記している。

この社論について李維漢〔党中央統一戦線部長。民主党派や党外知識人に対する政治工作の責任者〕『回憶与研究〔回想と研究〕』は、毛沢東が執筆したと述べている。たとえ自ら直接執筆したのではないにせよ、彼の指示に基づいて出されたのは明らかだろう。同日、毛沢東は、中共中央のために1つの党内指示「組織力量反撃右派分子的猖狂進攻〔力を組織して右派分子の猛り狂った進攻に反撃しよう〕」を起草し、まもなく展開される「偉大な政治闘争と思想闘争」に向けて綿密な手配を進めている。たった今より「全ての党機関紙は数十篇の文章を準備しておかねばならない。当初の高まりが下降し始めたら、直ちに次々に発表させるのだ。」ここで言う「高まりが下降し始める」のは、目論見では半月後が予定されていた。即ち、右派分子に更に「15日前後」の時間を与えて、その間に彼らに「全ての毒素を吐き出させる」ようにしたのだった。

日記から分析すると、郭小川は直ちに、すでに何が起きたのかについて聞き及んでいる。その過程は以下の通りだ。6月8日当日の朝、陸定一が劉白羽を呼んで話し込む。劉は10時30分に作協に戻り、郭小川を含む作協整風領導小組に対して、伝達を行なう。「陸は、強靱さを備えた戦闘が必要だ、人々が降りるようにさせればさせるほど、降りてはいけない、と言った。彼はまた、周揚にはセクト主義はないと認識している。人々はこれが1つの戦闘であること、文芸の方向に関わる闘争であることに全く注意していない。彼は、丁・陳闘争は継続しなければならない、混乱を恐れてならないと認識している。」次の日、彼は再び日記に、「今日、『人民日報』がまた社論を発表し、その中で名指しで陳銘枢〔政治家・軍人〕を批判した。闘争は先鋭化し、右派に宣戦したのだ。右派分子は、整風の名を借りて期に乗じて活動したのであり、これは免れることのできな

い階級闘争なのだ」と書き記している。彼が反右派闘争が如何なる性質のものか、心の内では明白であったことを証明している。

嘆かわしいことに、少数の中心人物を除いて、作協の大多数の人員は皆「事情がまさに変化し始めている」ことを知らなかった。知らないどころか、逆に彼らは、引き続き「全ての毒素」を「放つ」ことを奨励されたのだ。郭小川日記を調べると、作協内の真相を理解している少数の中心人物は、6月8・11・13日と3回の会議を開き、「更に大鳴大放〔大いに百花斉放・百家争鳴することを指す〕しなければならない」「引き続き大鳴大放しよう」「作協は更に大放大鳴をすべきである」といった決定を出しているのである。12日の日記にはこう書かれている。「8時半、党组会議〔党员グループ会議〕を開く。中央の幾つかの電報を討論し、右傾分子を反撃する問題について意見を交換する。作協は更に大放大鳴しなければならないが、争鳴〔反論して批判することの意〕もすることができる。」注意しておく必要があるのは、「中央の幾つかの電報」という一語だ。当時の手配は、即ち、秘密電報という形式を通じて迅速に各部局・部門に伝達していたことを説明している。

それ故に、真相を理解している1人としての郭小川は、内心の感動を抑えきれずに、連日の日記の中で、幾度も「手札を曝して勝負を賭ける」ことを渴望している。——彼は、結局のところ詩人であり、政治家ではなかった。怒りを静めることはさほどできないのだ。

「丁・陳闘争は継続しなければならない、混乱を恐れてはならない」という劉白羽が伝達した上述の陸定一の指示から見れば、丁・陳問題とは、党が作協に関わる右派分子のために提供した「最後に猛り狂った」舞台だった。ついでに少し説明しておけば、丁・陳問題の再審査が提起されて以降、状況は一貫して、1955年における丁・陳批判は間違いだったと認識する趨勢へと進展して来ており、郭小川が作協党组に代わって執筆し、中宣部党委員会との幾度もの協議・折衝を経て完成された再審査の

結論も、こうした趨勢を表現していた。このため自然の流れとして、丁・陳問題は、整風における作協の上から下までを貫く議論紛糾のテーマ、即ち、争鳴の焦点となっていたのだった。だが、まさにちょうどこの時にはすでに「方向転換」がなされており、丁・陳問題は、再び新たな性質を定められて「1つの戦闘、文芸の方向に関わる闘争」となったのである。だが、この「方向転換」は秘密にされて広くは知らされなかったので、丁玲・陳企霞を含む大多数の人々は、引き続き「再審査」という論理・思考〔1955年の批判は誤りだったとの趨勢〕を踏襲していた。

6月13日、丁・陳問題に関する第3回党組拡大会議が開催される。丁玲が発言し、自分が無実であることを訴えて、更に詰問した。「劉白羽は、私を闘争〔批判運動を展開〕することは〔中宣部〕部長執務室会議の批准を経ている、と言ったが、では、私は問いたい。部長執務会議の性格とは何か。口頭で申請して口頭で批准したのなら、会議録を提出してほしい。書面で申請し書面で批准したのなら、文書を提出してほしい。」嚴辰〔詩人〕や楊犁〔作家〕らも発言したが、いずれも疑問を質す態度だった。

最も劇的な一幕となったのは、康濯〔作家。『文芸報』常務編集委員〕が衝動的に発言したことだった。丁・陳事件の発端は、彼のところに大きな淵源があったのだ。1955年に彼が、率先して党組に記録資料1部を手渡して、「我々のところ〔党の文学指導部〕には2つの独立王国がある」（『文芸報』〔責任者は馮雪峰・陳企霞など〕と文学講習所〔責任者は丁玲〕を指す）と述べたのである。この記録資料に基づいて丁・陳批判が始まった。今では明らかに些か後悔している彼は、丁玲の顔を見ながら、「今では私は挑発者になったかのような、私は罪人だ、私もことをはっきりさせるように要求する。周揚・劉白羽・林黙涵〔文芸評論家。中宣部文芸処処長〕が、最初から『〔丁・陳〕反党小集団』という枠組を作っていたかどうかについては、私には実感はないが、彼らのセクト的な気配につ

いては、特に林黙涵だが、それが次第に明確になってきたとの実感が、私にはある」と発言したのだった。目撃者は、「康濯は躍起になって話したが、彼の横に座っていた劉白羽には止めようとの思いがあったが、康濯は更に発言して、彼の以前の丁玲に対する批判をひっくり返した」と回想している。この光景は実に興味深い。劉白羽の「止めようとの思い」とは、一方では自分たちの陣営が分裂するのを嫌いながら、しかし、見識のある人の生半可な理解の人への諫めにもなっていた。もし康濯が、劉白羽が何故止めようとするのかの全てを知ったならば、どうして彼は、この肝要な時期に「立ちほだかっても阻めない」勢いであのような発言をするに到るだろうか。状況を見抜いている人々と同列に立つ郭小川は冷静に傍観し、当日の日記では、この情景に対して喜劇的なスケッチを行なっている。「(康濯は)直ちに吐き気を催させる発言を行なった。この人の自己防衛欲は格段に強く、鬭争が尖鋭化するや否や、彼の真骨頂が現われ出た。」

会議では発言しなかった秦兆陽〔文芸評論家。作協機関誌『人民文学』編集委員〕は次の日(6月14日)、邵荃麟〔文芸評論家。作協副主席、作協党組書記〕宛に手紙を書き、1955年以来の丁・陳問題の処理について、「現在、作協の一部の人々は、過去のあれらのやり方には別の企てがあったのではないかとすでに疑いつつある。……このことが作協の多くの幹部たちの心の中で、暗い蔭となっている。この暗い影が、党組拡大会議が進展する中で、まさに拡大しているのだ。」(以上の引用資料は、李向東・王増如『丁陳反党集団始末』に基づく。)

ここに理解しにくくさせている事情がある。即ち、康濯と秦兆陽もまた党組のメンバーであり、6月8日に劉白羽が、陸定一の丁・陳問題に関する考え方を伝達した際に、彼らとその場になかったわけではないだろう。もし彼らが、上述の状況を郭小川と同じように理解すれば、あのように発言しあのような手紙を書くことなど、あり得ただろうか。1つの

可能性としては、判断に誤りがあったということはある得る。ある人々は、すでに「右派への反撃」が開始されたことは看取したとはいえ、事態の重大性をかなり過小評価してしまい、意識が行き届かなくて、未だ「鳴放」状態から敢然と抜け出すことができずにいたのだった。——6月15日の郭小川日記の一文は、こうした現象の存在を的確に明示している。「楊犁がやって来て少し話す。彼の思想の様相はやはり相当に混乱している。彼は、『人民日報』が右派に反撃するのに、こんなにも凶暴にすべきではないと認識していた。だが、状況はすでに変わっているのだ。」もしも当時の誰かが、核心的な秘密の内情を知る術もなく、自分の嗅覚も敏感でなくて情勢を読み間違えたとすれば、それは本当に危険過ぎることなのだ。

様々な側面から見ても、郭小川には、注意不足で危険に直面する恐れは全くなかった。——彼は、最初の段階で「闘争」の動向を掌握しただけでなく、元々、丁・陳に同情心は抱いていなかった。6月16日、彼が一貫して見てみたかった「手の内を公開する」時期が出現した。午後4時、「通知を受けて、周揚同志の執務室で会議を開く。」陸定一は、丁・陳事件の処理過程において相反する立場を示した二面性のある人々は、一斉に処分せよと言及したのだった。

周揚がまず口火を切ったが、「言葉は尋常でなく昂っていた。」彼は、不満を感じながら、1ヶ月にも及ぶ非難を聞かされ続けていたのだが、今、遂に、言いたいことを遠慮なく言えるようになったのだ。陸定一は再度、明確に基調を定めた。「現在、党内外には右の潮流があり、猖獗を極めているのは明らかだ。……丁玲・陳企霞は党に対して忠誠ではない。陳企霞が、もし最後まで自分の誤りを顕示するのならば、断固として彼を党から除名しなければならぬ。」「陸・周・劉は李之璉〔中宣部秘書長〕と党委員会を批判した。彼らのところで右の潮流が始まり、多くの人に影響を与えたのだ。」

「私も昂ぶって発言した」と郭小川は記し、「私は、中宣部は少し考えなければならぬと感じている。もしも右になってしまっていたのなら、糾す決心を下さなければならぬ」と述べている。

だが、作協の反右派は、その進展は決して順調ではなく、6月末まで掛け声ばかりで実行に乏しかった。強い決意を抱いた郭小川には、このことが気分深く影響した。6月22日、彼は、昂ぶってこう記している。「今回の反右派は、必ず徹底し切らなければならない。機関内でも境界線を鮮明にし、右傾的言論の一扫も必ずやり抜かねばならない。私は思う、必ずや決心を固めねばならない、右傾の誤りを叩き潰さない限り、決して兵を引かない、と。」だが、次の日には、意気消沈して「……最近の状況は、何の変化も生じていないかのようだ。整風は沈鬱の中で進行している」「右傾思想批判の運動は、非常に無力に見える」と書く。23日、「闘争が熱心でない」ことに対して「不快にさせる」との気持ちを引き続き示すと同時に、思考を進め始めたようだ。「狙いを定めることがさほどできないのに、偏った方向に進めるのも確かによくはない」と心配し、「やり出さなければ幹部を教育しようもないし、1年間かけて釣った魚も獲得しようもない」ことを恐れている。彼は、「党層の勝利を勝ち取るために、また生じる可能性のある副作用を免れるためには、闘争は必ず实事求是でなければならない。同時に、少数の右傾分子に対しては絶対に戦い抜かねばならない」と認識していた。彼は、まさに一心に忠誠を貫く党の「よい幹部」と言うべきなのだろう。上述の言葉は、公開の場で体裁のよいことを表明したのではなく、日記に記した内心の独白なのである。その真実度やそれが心底から発したものであることは、疑いようもない。

6月26日、彼は、作協総支部の会議の場で講話を行ない、反右派闘争の4つの境界線を提起した。(1) 批判を展開しよう、行き過ぎた闘争を懸念する必要はない、(2) 中間分子を争って獲得しよう、(3) 思想闘争の範囲内では、論争は許される、(4) 指導的幹部は軽々しく結論を下さ

ずに、発言は慎重にしなければならない。全体としての目的は、「断固として、大胆に、思い切って」反右派を展開することにあった。彼は、自分が提起した4つの方面の考慮は穏当なものだと考えていた。

彼の思考は、党中央が示した方向と完全に符合していた。事實は、彼が党の差し迫った必要をいち早く満たしたことを再び証明した。7月3日、周揚は鄧小平の意見を伝達した。「……現在、右派に対する勇気が足りず、方法が足りない。時間を延長して、闘争を断固として展開しなければならない。各機関は隊列を整え、計画をやり切らなくてはならない。」

ここにおいて反右派闘争は、初めて実質的な段階へと突入した。この後、郭小川の日記には、運動の進展が不利であることに対する不平は、もはや出現していない。逆に7月6日は、いきなりの第1句が、「ひどく忙しい。一息入れることもできないほどだ」であった。

毎日、会議を開き打ち合わせをし、参加者名簿や報告書を作成し、通信を編集し討論し、作協の反右派計画を修正をしていく……忙しいこと甚だしかった。7月中下旬には、作協の闘争の時間緊ぎと練習試合として、『新観察』と戈揚〔女性作家〕を集中的に闘争している。7月末、軍隊は移動して、丁・陳を闘争するという最重要の大芝居が開幕した。2年の長きに渡って引き伸ばされ繰り返された懸案も、今回はわずか10日前後で簡単に打ち倒され、遂に戦で功を挙げたのだった。8月7日、郭小川によって起草された「丁玲・陳企霞反党集団を撃破する」は、『人民日報』1面冒頭の位置により、この「文芸界反右派闘争の重大な進展」を天下に明示したのである。8月10日、郭小川は、「昨夜、〔周恩来〕総理と〔鄧〕小平同志が、文芸界の同志を招集して反右派闘争問題について語り、闘争はすでに大いに進展していて、多くの大鯨が浮上して来たとの認識を示した。……最後に、引き続き〔馮〕雪峰に対する闘争を展開することを決定した」と述べている。10日後、馮雪峰に対する闘争のピークが過ぎたばかりの時期に、我々は郭小川の日記の中に、艾青の名前が頻繁に



出現し始めるのに気づく。8月23日、阮章競〔詩人・劇作家〕・李季〔詩人〕を誘って東來順〔王府井にある有名なレストラン〕で食事をし、「彼らが艾青に関する発言を準備するのを手助けする。」24日、「阮章競・李季が私の執務室で発言稿を執筆する。」「私も艾青の問題について思考をめぐらす。結局のところ、彼の問題をどのように把握すればよいのか。」……

この他、引き続き、次々にまたばらばらと、羅烽〔作家〕・黄秋耘〔文芸評論家〕・呉祖光〔劇作家・演出家〕・劉紹棠〔作家〕・李又然〔作家・詩人〕・白朗〔女性作家。羅烽と結婚〕・蕭三・李清泉〔不明〕・韋君宜〔女性作家〕・徐懋庸〔散文作家・翻訳家〕・康濯を批判している。……その合間に、丁・陳に対する一歩進んだ批判が入り混じった。年末に到って、鬭争も疎らな様相を呈し始めたが、最終的な完結を見るには、なお次の年を待たねばならなかった。

1957年の「鬭争」を回顧して、郭小川は「1年の小結」の中で、「これは張り詰めた峻厳な1年だった。文学界で怒涛の鬭争が展開された。私自身、全ての鬭争の参加者だった」と記している。彼は心より誇りに感じていたのだ。実際、彼は少し謙虚に控え目だった。彼は1人の「参加者」では全くなく、身分は作協秘書長・党組副書記であり、重要な役割を果たしている。とりわけ丁・陳・馮・艾といった「大鯨」の「大芝居」においては、彼は「鬭争」過程の具体的な組織者であり、ほとんど全ての人の発言に向けて、責任を持って連絡し配置し督促したのである。文学界の反右派鬭争の成果を社会的に公表する新聞記事が幾度か出たが、その原稿もまた彼の手によったのだ。彼は、文学界の右派名簿を最終確定した1人なのである。

たとえそうであったとしても、1959年に批判される目に遭った際には、依然として多くの人々は、郭小川による「運動の指導は右傾だった」と認識し、彼の反右派の組詩「発言集」は「温情主義が多く」「立場を喪失

しており」「厳しく右傾化している」（「作協批判会議発言記録（1959年11月26日—？））」と厳しく責められたのだった。

## 6.

創作は言うまでもなく「闘争」においても1957年は、当然のことながら、郭小川が自分に対して頗る満足した1年だったと言えよう。しかし、彼の作協での不愉快な心情、彼の作協から異動したいとの思いは、拡大し増長していた。大雑把な統計だが、1年間の日記の中で少なくとも7、8回、作協の仕事に対する嫌気に言及したり、作協から離れるつもりとの考えを示したりしている。頻度の高さは1956年を大幅に超えている。2月11日、「四方八方から私に圧力をかけてくる。全く煩わしい。私は本当にやり続けたくなくなった」と記した。2月25日には、「……（劉白羽と）その後、また私の仕事の問題について話す。私は、私の嫌気が差している気持ちをほんの少しも隠さなかった。彼も私を説得するので、私は不平を述べた。だが、去りたいということを堅持しなければ、このように1年また1年と過ぎていき、頭髪はすぐに真っ白になるだろう」と書く。2月27日は、「疲れて気持ちも不快で、何か問題を考えるのを鬱陶しくさせる。もし、この仕事から離れることができれば……」と述べている。2月28日には、「また白羽の執務室へ行き、多くを話す。彼は私が作協に留まって働くように、また説得する。彼は、私の安定していない気持ちを批判するが、私の苛立ちはひどく、しばらく我慢できない」と書いている。3月10日、「作家協会の仕事は、本当に人をうんざりの極地にさせる」と記した。以上の言葉は、丁・陳再審査の結論を執筆している期間に書かれている。その手の負えなさによって、気持ちが劣悪になるのは理解できる。だが反右派闘争開始後、彼が「右派と戦うこと、これは人を嬉しくさせる」（9月4日の言葉）と書くと同時に、仕事に対する反感を絶えず表している

のは、少し不思議でもあるところだ。6月13日には、「私の部署は、おそらく長い間、離れることはできないだろうと考える度に、心が本当に不快になる」、8月28日には、「一種の奇妙な事柄が私を苛立たせている。……私は本当にここを離れて、現場に下りて行き働きたいのだ」、11月1日には、「〔林〕黙涵の執務室へ行って長く話し込む。思わす思いをこぼしてしまった。——私は作協で働くのが、本当に好きでなくなった」と記しているのだ。

彼が、このように繰り返し強烈に自己の感情を外に滲ませていくことは、極めて傷害性を帯びた結果をもたらした。——1959年下半期の反右傾運動において、郭小川が主要な闘争対象の1人となったのは、その本当の原因は、この点のみに存在したのだ。その他の理由、例えば、彼の作品「一個和八個」「望星空」に対する批判などは、批判に、より「内容」を持たせようとするためのみに過ぎなかったのだ。

1950、60年代の文芸界に対する数多くの批判は、一般的な思惟を用いて推し量っていくことはできない。さもないと巨大な誤解に陥りかねない。通常、我々は、政治上、思想観念上における被批判者と批判者とは相反する、少なくとも一致していないと考える。だが実際上は、往々にしてこうではない。多くの被批判者の思想と立場は、批判者より少しも「右」ではないのだ。まさにこのために、80年代の改革・開放の時代において、人々は、少なからぬ揺るぎない「左派」が、当時、意外にも「右派分子」あるいは資産階級思想の代表人物として、かつて批判に遭遇したことがあったことを発見し、理解に苦しむ思いを味わったのである。この面で「反右派」において最も名高い例が、中央美術学院院長で美術界最大の右派・江豊だった。彼はどうして右派とされたのか。「他の右派分子と違うのは、江豊は左に立って党を批判したからだ。……百花齊放は社会ではよいが、我々の学校内ではダメだ。我が校内では、ただ1つの花だけが咲くことが許される。それは社会仕儀リアリズムだ。」（朱正

『1957年の夏季〔1957年の夏〕』

郭小川が「右傾」として批判されたことも、思想・立場とは全く関係なかったと言うべきだろう。本論の記述は、1957年の大風波の中で、彼は、党に対しては忠誠の名に値し、思想は党と完全に一致し続けることができ、闘争は絶対に必要であると鮮明に認識し、行動も積極的だったことを説明し得よう。次に、文芸観においても、我々は、彼と正統的な革命文芸理論が背離する部分を探し出すことはできない。それに留まらず、彼は実際に、当時の詩歌創作において「時代精神」を最も体现できる代表人物だったのである。それを証明するに足る1つの状況がある。——1957年10月初め、態度が正しく健康な青年批評家・姚文元〔文革期には「四人組」の1人となる〕は、自ら『詩刊』に手紙を寄せ、郭小川詩歌の専門評論を書かせてほしいとの意向を示した。郭小川は10月3日、臧克家・徐遲の執務室でこの手紙を読んだ。姚文元の基本的評価は、「私の詩の中には、強大で鮮明な共産主義思想の力量が備わっていると考える」というものだった。12月16日、果たして姚文元の評論が『詩刊』に届けられた。それは2万余字に及ぶ長文で、郭小川は読後、「彼の鋭利な情熱には敬服する」との感想を示したが、郭はある種の考慮から、『詩刊』にはこの文章を掲載しないように勧めた。発表されなかったことから、姚文元が郭小川のために長篇評論を書いたことがあるということは、ほとんど知られていない。その原稿もおそらく行方知れずだろう。このことに関して、我々は2点注意しなければならない。第1に、姚文元が政治的角度から郭小川詩歌に与えたあれほどに高い評価は、この人物の政治的嗅覚の敏感さからして、見誤っていることはまずないだろう。第2に、姚にこの文章を書こうとの思いが生じたのは、反右派の運動が始まった後だった。そうした時間状況では、彼のこのような論評対象の選択に対しては、前もって政治面における全面的で周到な弁別を経ていたことを、意味しないことはあり得ない。

情理から推し測った際には、郭小川が痛ましくも「闘争」に遭ってしまったのは、まさしく降って湧いた災難に属する。これは、まさに批判されるべきでないのに完膚なきまでに批判された人であろう。だが、状況は、「人は家の中で座っていても災いは天から降ってくる」という、一切の道理もない程度にまで立ち到っていたかどうかなのだ。怪しいことは怪しいが、やはりそこまでではないだろう。私なりに一部始終を仔細に思考するに、郭小川と周辺環境との間の衝突が、積年に渡って蓄積されていることに気づかされる。矛盾は一貫して取り除かれることなく存在し、かつ次第に激化し、最後には、当時の条件と特徴に従って、彼が批判されたことによって決着が下される——5、60年代全般に渡って、矛盾を解決する方法は往々にして闘争と批判であり、その対象者は、おそらく批判や闘争をされる必要のない態度であったとしても、対象者をそうしたレベルに位置づけて処理を進めたのだった。「その罪は万死にも値するが、これを誅して片を付ける」といった趣が大いにあるのだ。まさしく、闘争と批判という方法が最も迅速かつ簡便だからであり、これ以外に他の方法を探究することは意味もないし面倒なだけだからであり、はっきり言えば闘争と批判を熱愛し崇拜し熱中するからなのである。総じて、1つの、闘争が不滅で批判が万能の時代だったのだ。

では、郭小川と作協や作協の仕事との間には、結局、如何なる衝突があったのだろうか。

第1は、「体〔本体〕」と「用〔手段〕」の衝突である。1949年〔建国〕以降、中国における文学は体制化が進み、各方面で「一体化を全力で尊ぶ」ようになった。中国作家協会とはそうした文学体制の組織形態である。それはその「用」となるだけでなく、その効用を十分に発揮しなければならなかった。郭小川は如何なる職位に就いていたのか。作協秘書長である。この職位は、作協の「用」の最も具体的・日常的な体现者である。言い換えれば、ここに配置された人は「歯車と螺子」、即ち、劉白羽らが

言うところの「従順な道具」となることを、甘んじて受け苦勞を厭わずに堪えなければならないことを意味するのだ。郭小川は、党の文学体制については、当然ながら心より擁護しており、ある程度までは、黙々と体制の道具としてその役割を果たすことは、やり切ることができた。しかし、体制は機械のように運行できるが、人間は結局のところ機械ではない。長い時が経つ内に心に煩わしさが生じ、神経に持ち堪えがたいところ生まれるのは、もとより想像できる。郭小川が大いに不満を抱いたのもこうしたことに過ぎなかった。不平をこぼしてやる気をなくし、更には時に痲癩を爆発させたのも理解し得よう。だが、その当時、人間の弱点や感情の機微に対して大目に見ることは決してなかった。「大胆不敵」に個人主義を行ない、党に我が儘を言うことだとのみ見なされてしまうのだ。小さな1つのことが遂には大きな巻き添えになる。郭小川日記を仔細に調べてみると、彼が得たいと望んだものは、少しばかりの創作休暇や現場に下りて見て回りたいといった類のことに過ぎないのだ。もしこうしたことが実現できていたら、私は、彼が仕事に対して嫌気が差す気持ちを生じる如何なる理由をも見出すことはできないのである。

第2は、共同作業が順調でないことがもたらした人間関係の衝突である。作協党組の正副書記は3人で、邵荃麟・劉白羽そして郭小川である。郭小川の目には、邵荃麟は発想や言動が現実的でなく、発言も常に適切ではないと映っていた。劉白羽は非常に有能だが、このため強気かつ勇猛であり、副書記で序列は邵荃麟の後なのだが、腹を決めて決断を下すのは往々にして彼だった。この2人の同僚に対する態度だが、邵荃麟に言及する際の郭小川の言葉には、軽んじる気配が含まれている。例えば、「会議は終わったのに荃麟がまた多く話す。この話は本来は言わずにすむことだ。無駄に時間を引き延ばしている」(3月11日)といった具合だ。劉白羽に言及する際には納得し畏怖しているが、より多くの場合は憤然としている。日記の多くの場所で、劉の彼に対して顎で使うような偉ぶっ

た態度や尊重に全く欠けた様子について述べている。2月28日には、劉から叱責され「苛立つ」「我慢できない」と書く。6月10日は、劉は「本当に人を不快にさせる」と記す。6月29日夜、郭小川が自宅で劉真〔児童文学者〕と話していると、劉白羽が「猛烈な剣幕でやって来て」「劉真がいるのも顧みず」、仕事における2つの件で郭小川に対して無理やり非難を加えた。郭は、「私はこの人の激昂ぶりを実によくわかっている。道理が全くなく実事求是で全くない時があるのだ」と記している。これは日常茶飯のここのようだが、郭小川に即して見ると、常に「奇妙で訳がわからない」となる。当時の作協の人々は、劉白羽は性格が「横暴」だったと述べている。郭小川は実のところ、人的な交際に非常に長けた人だった。こうした人が、いつも対処できないと感じているということは、劉の強烈さは並大抵のものではないのだろう。12月30日、劉はまた謂れない怒りを爆発させたが、今回は郭小川も辛抱強く「対処」することを失い、「私が言葉を詰まらせながら言い返すと、その後は彼も怒のをやめた。空気はひどく張り詰め、質問はしにくくなった。」だが、郭小川が密かに示していることによれば、彼らの間の衝突は、性格によるものだけではなかったようだ。11月21日、「10時まで話し、白羽と一緒に黙涵の執務室へ出向く。自動車の中で、彼はまた奇妙にも中宣部は私に対して何か意見があるなどと言う。私は結局どうになってしまうのか。まさか私をいろいろと制限しようというわけでもあるまい。多かれ少なかれ知識人の妬みだ。」2人間の衝突は、進めば進むほど激しくなる。様々な場面に対処するのに慣れた郭小川も、後に一度、あろうことか抑制できなくなって、劉に面と向かって「馬鹿」と罵ったことがあった。人を驚かすに足ることだった。当然ながら劉白羽との不和は、郭小川が闘争と批判に遭うことをもたらした幾つかの端緒の1つだが、枝葉末節に属すると見るべきだろう。だが、それでも確かに直接の導火線ではあった。

第3は、文芸界に対する恐怖と知識人に対する嫌悪である。この面が

実は、郭小川が作協に留まりたくない比較的深層の原因だった。文学創作に従事するには、もとよりその理想とする場所があった。だが、文人と文芸界に対しては、好きだとは本当に言えなかった。当初、作協に来た際も、実は嫌々だったのだ。彼は、検討書の中で、再三「作協は状況が複雑だ」「作協は複雑で誤りを犯しやすい」と指摘している。文人が集まると諍いも多い。これは有名なことだが、赴任以降、身をもって体験した事実もやはりそうだった。目を上げてあたりを見回すと、何処もが、文人相軽んず、心底は不満だらけ、有能な人への嫉妬、徒党を組む、前言を翻す、風見鶏といった状態ばかりで、なおかつ、その多くの苦しみをもしっかりと味わったのだ。これにより、1957年上半期の丁・陳問題再審査の結論を出す経過は、悲惨と言うべきだった。「多くの人が、1955年の丁・陳闘争会議で自ら提供した材料を、全て認めなくなった。」「会議や会議外の場で、幾度も恨み言を言いながら私に材料を提供した人も、認めず翻すのだ。」「私のこうした心情は、かつて蘇一平〔不明。中宣部幹部〕・龐季雲〔不明。中宣部幹部〕同志、更にはもっと多くの同志たちの前で吐露したことがある（中宣部の同志たちの証言によれば、私自身は誰に言ったのかも覚えていないのだが、いずれにせよ、この種の心情を1度ならず漏らしたことがあり、それが伝播して、下心を持つ人々が党を攻撃する武器となったのだった。）」（「我的思想検査〔私の思想点検〕」）このことは彼に、知識人が知識人と一緒になって組織している作協に対して、避けて恐れ蔑む気持ちを持たせたのだ。彼の胸中には常にこうした心情が充満しており、それが1957年に彼が創作で吐き出した最も重要な主題でもあったことを、我々は看取できる。新年の初日から構想され始めた「深深的山谷」は、「この詩の中では、1人の知識人の恥ずべきかつ哀れむべき相貌を描き出すことを企図している。」1月23日には、「この1年間に、もし10篇か20篇の短篇小説が書けたら素晴らしい。私の眼前には、数人の知識人の影が浮かび上がっており、私は彼らを理解し



ているが、決して彼らが好きではない」と述べている。2月1日には、「深  
深的山谷」は、「知識人に対する鞭打ちのためだけだ」と再度強調した。  
3月9日、知識人問題に思い到って、「本当に嫌悪する。彼らは、左に行っ  
たかと思えば突然右に行き、波乱を巻き起こして煽り立てる。自分は永  
遠に『正しい』が、他人に対しては非難することだけを知っているのだ」  
と称している。3月23日には、再び「深深的山谷」は「私のある種の知  
識人に対する憎悪を描出したのだ」と表明している。止めどなく休まず  
に水火の勢いである。郭の知識人嫌いは深いと言うべきだろう。このよ  
うに、知識人とは俯けば会わないが顔を上げれば会ってしまう作協では、  
彼はどうして心持ちを伸びやかにできるだろうか。

第4は、内心の衝突あるいはジレンマである。郭小川は「戦闘性」が  
あると見なされて、作協秘書長の職務に就いたのだった。作協に来て以降、  
特に1957年の「闘争」における彼の態度は、他人の印象では、かなりの「闘  
争のやり手」だった。しかし、それはいわゆる「1つ目のみを知って2つ  
目を知らず」である。「闘争」に関して、郭小川の内心には「人には言え  
ない隠し事」が大いにあったのだ。後の「闘私批修」〔文革初期のスロー  
ガン。毛沢東が「私心と闘い修正主義を批判する実権派と闘争すること」  
を提唱した〕の際に彼は、自分は実は闘争を恐れていた、更には「政治  
闘争は本当に怖い」という「陰気」な心理を秘めていたと幾度も白状し  
ている。何故か。それは、1943年の延安における幹部審査から説き起こ  
さねばならない。当時、「闘争」の圧力が迫る中で、彼は曖昧なまま、危  
うく自分に「特務〔敵のスパイ〕」という罪名を着せられるところだった  
のだ。彼の新婚の妻・杜恵は、如何なる根拠もなく捕まって、2年間、社  
会部監獄〔強制労働による思想改造を行なう監獄〕に拘禁されたのである。  
こうした記憶が心の奥底に植えられていた。だが、あたかも表面上は現  
わし出すことができずに、相反する形式（大胆に闘争する）で修正を加  
え自己補償しなければならなかったのだとも理解し得る。それ故に郭小

川は、「闘争」に対して数年来、実際上は一種の「二面性を持った人間」の状態に置かれていた——外在の一面と内心の別の一面である。他人にはっきりと示す外在の一面は、かなりの戦闘性を備えており、「闘争」に対しては激情と渴望に満ち溢れ、殺到さえしていく。彼は理性的に、自己をこのようにしようと懸命に励ましていたのだ。だが、心の隠された片隅では、いつも「政治闘争は本当に怖い」という言葉が遠くに漂っていて、この声が如何なる時でも、いつかはわからないが「闘争」が突然に自分と家族の頭上に押し寄せて来るかもしれないと不安にさせるのだ。知らず知らずの内に、「闘争」の渦中から逃れ遠ざかろうとする潜在意識が存在していた。このため彼は、一方では、作協で連綿と絶え間なく続く1つ1つの「闘争」に情熱を滾らせながら加わった。だがもう一方では、果てしなく続くかのような「闘争」は、彼の心理に重大な不安を帯びさせないわけにはいかず、安心感を欠乏させた。「闘争」に対して無限の喜びを感じ、「闘争」しないと全身が体調不良になる人は確かに存在するが、だが郭小川は、「闘争」に喜び勇むが、必ずしもそれが好きだったわけではない。あれらの時期に積極的に「闘争」したのは、実は自己保全を意図していただけだったのだ。切羽詰って、作協というこの災いの地に別れを告げ、人知れず姿を消してお仕舞いにしようと思うに到ったのも、当然ながら自己保全のためだった。もしこのように解釈するならば、行動面では喜び勇んで「闘争」し、内心では「闘争」を恐れているという郭小川の矛盾現象は、逆に統一されているのであり、1枚のコインの両面なのである。

第5は、創作問題が引き起こした苦しみである。「知識人」に対する郭小川のあのような不適應には、この輩の多くの「劣悪性」の他に、彼自身の「人に言えない弱み」も存在した。率直に言えば、彼は卑下する心理を携えて作協に来たのだ。その頃の彼は、ある言葉で形容すれば「一窮二白〔第1に貧しく第2に文化的に空白だという意味。克服すべき中

国の現状を表すスローガンの1つ]」だった。文学上では資本は皆無で、若くて名声にも乏しい。「[作協に]来た直後、私は作家たちの眼前では、劣等感を持っていた。ある作家たちは『私を見下していた』し、『どこから来たかもわからないこの柔な若者が、何と我々を指導するのだ』と考えていると感じた。更には『作家協会の活動を非作家に指導させるなんて、全く笑い話だ』と言う人までいた。」このことは彼を大いに傷つけたが、「これは一種の刺激だと感じた。作家協会の仕事を、非作家がここで行なうことは難しいと思った。」ではどうするか。実績によって、傲慢で不敵な全ての連中に反撃するだけだ。「最も良いのは作家協会を離れることだ(行政職をしないことでもある)。離れないのであれば、しっかり仕事をするためにも、創作をしなければならない。」「執筆する機会さえあれば、私の才能も他人に劣るとは限らない。」彼が懸命に創作したその原因には、卑下した心理の治療と確かに関連していた。そしてまさに1957年、狂気じみた努力の結果が現われ出た。「私が『深山的山谷』と『白雪的頌歌』を書き発表して以降、私の創作における確信は大いに強くなった。私は、自分が1本の独特の創作の道を探し出し、自分だけの独自の風格を形成したと感じた。」(「我的思想検査」)だが思いもよらず、古い弱みをまさに除去したら、また新たな暗い影が広がってきたのだ。彼を「非作家」と嘲笑する人はいなくなったが、彼に対して書くことに励みすぎる、書くものが多すぎるとの不満を抱く人々が、次第に多くなってきたのである。1959年の批判の際には、創作に熱中したことが、人々が広く郭を非難する理由ともなった。この詰問は、この批判の時期に初めて提起されたのではない。日記における記載では、早くも1957年には「同志たち」がすでに、このことについて口を揃えて言い出して、気持ちや態度が落ち着きにくいことを際立たせている。6月下旬、郭小川は急性胃腸炎に罹り発熱し、自宅で療養するが、挙句の果てには詩人・蔡其矯が、「遂に組連室〔不明。党組連絡室か〕の同志に、郭小川は病気ではなくて家で詩

を書いているのだ、と伝えた。」(6月25日)病気になったのは確かなのだが、蔡其矯は何の根拠もなくでまかせでそう言ったのだった。これは「大衆世論」がすでに形成され、世間で言い囃されていたことを反映しているよう。郭小川に言わせれば、これは全く筋が通らないことだ。私が一窮二白の時、あなた方は私を見下し、私を見て「笑い話」とした。私が創作において成果を生み出せば、あなたは逆にうれしくなくなり、振り向いて私を非難するのだ、個人の名声と利益に向かっていて、仕事に全く力を尽くしていない、と。当時の事実は確かにこのようだった。「大衆」にこうした議論があっただけでなく、指導部層の内部さえもこうした論調を備えていたことは、前述した、劉白羽が11月21日の車中において郭小川に告げた、中宣部には「何か意見がある」にも示されている。その内容は、郭小川の創作に焦点が合っているとすべきだろう。郭は憤激してこれを「嫉妬」と評したが、夜に帰宅してからは臧克家に、『詩刊』が姚文元の文章を掲載しないように要求する」という手紙を書いている。意図は「樹大招風〔木が大きければ風邪尾を多く受ける。有名になると攻撃を受けやすいという意味〕」を避けることにあった。如何なる人であっても、創作面が順風満帆で勢いが強い時に、幾度もブレーキを踏ませられ速度を緩めさせられたら、恐らく命令には従い難いと考えよう。共産党員であろうとも「無産階級文芸戦士」であろうとも、それが人情の常ではなかろうか。彼、郭小川は、同様の局面が別の人の身の上に発生したら、彼らは別の選択を行なうなどということ、全く信じてはいなかった。いわんや彼の創作の成果と多産は、朝早くから夜遅くまで懸命に時間を搾り出したこと、休日も出かけずに家に閉じこもっていたことと引き換えたものなのだ。仕事上で怠けたり横着をしたりしたものはなかった。「私は結局どうになってしまうのか。まさか私をいろいろと制限しようというわけでもあるまい。」これは心の奥底の無念であり、悲しい恨みや抗議だった。だから彼は、必然的にこのような解説をしたのだ。

「多かれ少なかれ知識人の妬みだ。」

郭小川と環境との不調和を、多方面から詳細に観察し緻密に分析した結果、筆者が得たことが上述の5点にほかならない。その中でも、結局のところ、どの点が革命的原則と関連があったのだろうか。枝葉末節の小事に属すると言えるのだろうか、元々は極めて正常であったか、一時的に感情・意識を高めたか、ということなのである。だが、おおよそ「尊重」と「疎通」を備えることができれば、速やかに解決するのだ。しかし遂には、太鼓を鳴らして攻めていく厳しい政治批判に訴えなければならないのも、また不思議ではないのだろう。郭小川が遭遇したのもこうしたことであり、その他の被批判者もまたそうだったのではないか。最終的には、そうした1つの時代の観念がもたらしたのであり、あの当時の作家協会の「仕事の原理」がもたらしたものだだったのだ。1957年の作協「闘争」の責任者から1959年の「闘争」される主人公へと到って、郭小川に何か悟ることがあったとすれば、彼が「我的思想検査」で述べた「〔毛沢東〕主席は、半世紀は闘争する備えをしなければならないと言った。これは意味深長だ……」だったのだろう。

